

第1回県立高等学校改革懇談会（船引・小野）【小野】記録

日時 令和4年6月6日（月）14時00分～15時30分
会場 小野高等学校 視聴覚室
出席者 別紙一覧参照
傍聴者 12名

進行

（1）開会

（2）県教育長挨拶

県教育長の大沼でございます。皆さまにおかれましては、日ごろより本県教育に多大なる御理解と御協力をいただき、感謝申し上げます。

ただ今、懇談会の委員として委嘱状を交付させて頂きました。村上昭正小野町長をはじめ、委員の皆様には御多用中にもかかわらず委員をお引き受けいただき、本日の改革懇談会へ御出席下さいましたこと、心より御礼申し上げます。

さて、福島県教育委員会におきましては平成28年に、県民各界の代表の方々からなる、学校教育審議会からいただいた答申をもとに、今後10年間の県立高等学校改革の方向性を示す長期計画として、平成30年5月に「県立高等学校改革基本計画」を策定いたしました。この中では、少子化により県内の中学校卒業者の数が、10年間で5300人減少するという実態をふまえ、3学級以下の学校は統合する方針を示しつつ、その一方では、高等学校に求められる学びの在り方や地域における役割などを踏まえ、学校の位置づけや特色を明確にし、魅力ある高等学校づくりを進めることとしております。

このため前期実施計画期間中の成果と課題や令和3年12月策定した第7次福島県総合教育計画を踏まえて、令和6年度から10年度までの具体的な取組を示すものとして、後期実施計画を今年1月に策定いたしました。

この地域におきましては、小野高等学校と船引高等学校を統合し、生徒の幅広い学習ニーズに対応した教育活動を充実させ、両地域をフィールドとした探究活動により大学進学から就職までの幅広い進路希望が実現できる、新たな高校を設置する方針をお示しいたしました。小野高等学校においては80周年を迎える伝統校であり、地域を支える多くの有為な人材を輩出してまいりました。

それだけに、関係の皆様への両校に対する熱い思いは、重々承知しております。しかしながら、将来を担う子どもたちに、より良い学びの環境を継続的に提供することが、我々の責務であると判断し、両校を統合する方向性を示したところであります。

本日は、小野町の地域の有識者の皆様や、学校関係者の皆様にお集まりいただき、後期実施計画策定の経緯、そして新たな学校の在り方等について説明させていただいた上で、皆様から御意見をいただきながら、今後の教育環境についてともに考えてまいりたいと思います。どうぞ忌憚のない御意見をいただきますようお願い申し上げます。簡単ではありますが挨拶に代えさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(3) 説明

(4) 懇談

<質問>

【有賀仁一】(小野町教育委員会教育長)

今の説明の中で通学の利便性を考えて、船引高校に統合すると判断したとの事だが、そのようになった具体的な理由を聞かせてもらえればありがたい。今の説明の中では、「田村市・小野町」という括りで説明されていたが、「阿武隈高地」全体で考えていった時、私を感じるのはいわき市の三坂地区や川前とか、川内村や石川郡の平田村など、地理的な状況から見ると、むしろ小野の方が良いのではないかと感じた。県側は「利便性」という理由で説明をしたわけだが、具体的な部分を話してもらいたい。

【中野正人】(県立改革室長)

統合校については、先程の説明通り、「1 学年 4 学級の総合学科の学校」とし、場所を船引高校にしたのは、「利便性」という表現を使ったが、学区に捉われない総合学科という事であるため、広くは、二本松などの県北地区、あるいは郡山の方からも通学が可能になるという事も考え、統合校は、船引高校の校舎を利用して、運営していくこととした。

<懇談>

【村上昭正】(小野町長)

まずは、県側から説明を受けたわけだが、今回の統合は、県教育委員会の考え、また、県立高校改革室の考えに基づいて、話を進めてきたと思う。ただ、ここに存在する市や町側から考えると、確かに、少子化が進み、そのような改革が進んでいくのは、当然の事であると思うが、その地域にとって、「80 年に渡って地域に存在した高校が無くなる」というのは、教育の面から見れば、第一義的に考えなければならない問題なのかもしれないが、高校の存在というものを、もう少し、丁寧に、高校が無くなる地域に教育以外の面からも説明するなり、何らかの方策が必要ではなかったか、という気がしている。それと、これは、今後の課題という事になるが、これから、船引高校と小野高校が統合する時、どういう形で統合するのかを協議しなければならなくなると思う。というのは、例えば、小野高校の生徒を残したまま、統合してしまうのか。それとも、小野高校の生徒がゼロになった時点で、統合するのか。これは、大きな問題である。仮に、生徒が残った状態で統合するのであれば、町としては、考えなければならない大きな問題になってくる。また、小野高校の生徒がゼロになった時点で「統合」となったら、小野高校は実質的に「廃校」になってしまうと、私は考える。だから「統合だ。統合だ。」と言われても、なかなか理解できないのである。最終的に、どのような方法で統合するのか。それから、高校の在り方について言わせてもらえば、町にとって高校の存在というのは、大変、大きなウエイトを占めているのである。福島県以外の県では、高校の改革をする際、まず、地元との協議から始めた県もあると聞いている。だからこそ、事前に協議をして欲しかったと、我々は考えている。人口減少は、当然の事ながら避けて通れない問題だが、そういった話を事前にしてもらえれば、何らかの改善ができたのではないかと思う。だからこそ、今回の改革の進め方には、大きな疑問を持っている。それで、今回、こういった形で説明をして頂いた事については、お礼を申し上げたいと思う。また、

当初は、船引高校と同時に開催する予定だったが、それが不可能になり、小野高校単独になったのにも関わらず、説明会を開いて頂いた事についても感謝申し上げたい。ただ、町民の中には、統合に納得していない人も居るので、町民向けの説明会を是非、開いてもらいたいと思っている。段取りについては、町側で行うので、本日のような形で良いから、町民全体向けの説明会を開いてもらいたい。

【菅野崇】(県立高校改革監)

それでは、重複する部分があるかもしれないので、一旦、皆様から御意見を伺ってまいりたい。

【村上勝徳】(地元有識者)

私は、1学年を4~6学級に持っていく方針が決められたとすると、統合は避けて通れないと認識している。私の考えというのは、今、全国的に、どこの地域も「人口減少」「少子化」が共通の課題となっている。その課題に対する対策として「人口が減ったから学校を減らす」「利用者が減ったからバス路線を減らす」という事をすれば、これらは全て「地方創生」を逆行させてしまうような政策になると思う。行政が「不便な所」「人が居ない所・減少していく所」は見捨てるという方向性で取り組むという事であれば、人口はますます減っていく。だから『無くす』という事をする前に、『無くさないで済む方法』はないのかという事を、一緒になって考えてみないか。」という提案が欲しかった。例えば、地域の野球経験者の人に野球部の活動を応援してもらおう。もちろん、野球ばかりでなく、バレーボールでも陸上でも、それぞれ地域に経験者が沢山居るので、そういった人達に学校と関わってもらおう。そうなれば、子供達に「小野高校で部活動ができる」という事を見せる事ができるようになり、加えて、地域との繋がりを作っていけるようになる。そうなれば、「福島県では、すごい事をやっている」と注目され、全国から見学に来る人が出てくるかもしれない。全て、世の中の流れと同じように「人が居ないから、子供が減るから、学校を無くすのは当然である」とする事は、当たり前だが、そういう事にならないようにする取り組みを福島県は実行していくという気概が私は欲しいと思っている。それが地方で、同じ共通の課題に取り組むヒントになるのではないかと思う。結局、人は便利な所、人の多く集まる所に行ってしまう。極端に例えれば、人口減少傾向にある福島県から、みんな東京に行ってしまうという事である。そうではなくて、逆に東京から人を呼ぶようにすれば良い。都会ばかりが人の集まる所でない。そういった考えに基づき、一つの取り組みとして、県立高校の再編成を考えて欲しいと思っている。もし、船引高校に統合されたら、親も勤め先が、みんな船引になってしまうかもしれない。

【阿部君江】(地元有識者)

私は、小野高校の応援団というような、町で準備して頂いた連携協議会に所属している。連携協議会は、小野高校に何らかのお手伝いができる事をしたいという委員が集まっている。今回、この1月に、改革の計画が公表されてから、町の皆さんから「本当にショックだった」などといったような意見が、多数寄せられた。それで、つい先日、会議を持ったのだが、私は、その会の代表をやっているもので、皆さんの代わりに、県の方に意見をお伝えしていく義務があるのではないかと思います、3点ほど、県側に意見を述べさせて頂きたいと思う。まず、1点目、公表された統合については、誰でも、いろいろな事情から「これは仕方が無い」「い

ずれば、こうなる」と心の中では分かっていたと思うし、誰も変な事ではないと理解はしていた。けれども、この統合を公表する前、何故、本日のような懇談会や説明会を開いてもらえなかったのか。それを、皆、とても残念に思っていた。

それから、2点目は、統合後の田村地区の状況が懸念される事。田村地区というのは、西部と東部に分かれており、三春・船引が西部、そして、こちらの小野や滝根の方が東部といった形で、生活してきた。それで、今までは、西部と東部、それぞれ平均的に高校があって、それに加えて、周辺の阿武隈高地の子供達も集まって、学校がそれぞれ運営されてきた。ところが、仮に統合された後、西部地区の学校2校だけになってしまったら、東部の子供達はどうかという事態になってしまう。加えて、今、東部地区の学校には、先程出た、阿武隈高地の子供達が、大変な思いをして通学しているわけだが、そういった阿武隈高地の子供達もどうなるか、心配になってくるのである。それで、この小野高校のある、小野新町地区については、交通の便が良いので、それほど心配は無いのだが、この他の地区、特に阿武隈高地から来てくれている子供が結構多いので、そここのところをもう少し考慮してほしい。

そして、3点目は、小野高校について。小野高校は、今迄、地域密着型の学校としてやってきたわけで、家庭クラブとか農業クラブが活躍し、草花の手入れを一緒にさせてもらう事もあった。また「うまいもん甲子園」の応援に行った時もあった。それから、石垣市との交流においても、一生懸命みんなで協力して、それを町づくりの一端にしようと頑張ってきた。それが無くなった時、この小野町が、それでなくても進んでいる過疎化が、一層進むのではないかと町民としては懸念している。それで、「なんとなく、地方創生とは逆に、この地区が見捨てられた感じがする」という委員の意見が出てしまった。

いろいろ、委員からの意見は、もっと沢山あったわけだが、一応3点という事で、お伝えした。以上だ。

【二瓶晃一】(小野同窓会副会長)

まず、改めて、確認しておきたい事がある。先程、説明があった、統合するに際しての教育の基準として、高等学校が主に1学年4クラス、これについては、学年の学級数が2クラス以下になる学校が福島県は多かったという事で、そこをきっかけに統合する施策が入ったわけだが、改めて、質問する。学級数が「2」だと、何が問題なのか。先程の説明では、「他県に比べて、非常に割合が多い」という事があった。私の率直な感じ方としては、もし、その2クラスの所で、さほど教育事情に問題が無ければ、大丈夫ではないかと感じている。先程、県側から、「学校が統合するけれども、生徒一人一人にきめ細かい学習指導をしていく」といった話が出てきたわけだが、学級数が2クラスと少なければ、きめ細やかな教育ができるのではないかと、私共は単純に思ってしまう。だから、逆に、福島県がそういった小さな学校が多いのであれば、福島県の特徴として、「小さな学校だが、きめ細かい教育をやっていく」という事が可能になるのではないかと思っている。一般的な民間企業なら、「顧客の数が減少したら、スタッフの数を減らさなければならない。」といった経済的な理論の中で考えるわけだが、これとは別に、「教育現場において、一定の数字に意味があって、その数字に達した場合、教育を実施できない」といったような事を、みんなで認識していないと、仮に統合したとしても、また同じ状況になってしまう。だから、そういった、数字的な認識の部分を明確にしてもらいたい。後は、何人か、皆さんから、お話があったが、地元の

人達の意識と学校での施策の「ズレ」というものが、どことなく齟齬(そご)を生んで、都市伝説のような学校の風評ができあがってしまった。だから、もう少し、学校のマネジメントそのものに地域というものが関わらないと、地域と一体になって学校が存続していくのは難しいのではないかと、私達は、今回、様々な存続活動を通じた上で感じた。今後、様々な施策を考える時、特に都市部でない所の学校においては、学校そのもののマネジメントに地域の人達が入っていかないと、学校が存続していかなくなってしまうような気がする。そういった意味では、先程、商工会長(地元有識者村上氏)が言ったように、もう少し、学校が地域に対して、いろいろなアプローチをした上で、学校を運営していけば、うまく回る事もあったのではないかという感情を持っている。今後、いろいろな形を考えた時に、そういった事が必要になるのではないかと思う。地元の自治体の方々に、厳しい話をした事もあった。同窓会も力不足な部分があったが、今回の統合の事に関して県は「学校を選択するのではなく、船引と小野のどちらに置くか」という地域の選択をして、その結果、小野町は選ばれなかった」という話をしている。確かに、小野町側に力が無かったと言える部分もあったが、逆に厳しい見方をすれば、地元の生徒が地元の高校に入らないという現象は、我々の力不足でもあると思うが、子供達が、私立高校に行って県立高校を選択しないというのは、県の方に何らかの問題があるという厳しい見方もできると思うのである。これは、「一方的に県側が悪い」という話をしているわけではない。今後、このような地域においては、県立であっても、地域の人達がマネジメントに参加する事が必要になると思うし、それが無いと、学校の存続が難しくなってくるのではないかと思う。それと関連して、先程、田村市と小野町についての数字を出してもらったが、小野町というのは、その近隣地域を含めて「地元」なのである。だから、「地元」というのは、別に小野町の問題ばかりでなく、平田村も小野高校の地元だし、いわき市の川前町とか三和町といった所も伝統的に、小野町の地元といった地域なのである。意識として、田村市が船引の地元と考えるのであれば、小野の地元は、周辺町村を跨いだ地域なのだという意識を常に持って頂いた方が、この地域の現状に合っているのではないかと思う。どうしても、俯瞰して上から見てしまうと、行政のエリアで、ものを考えてしまいがちだが、小野町とその周辺の阿武隈地域というのは、伝統的にそういう風なもので成り立っている。当然、周辺地域の子供達の人口は少なくなっている。ただ、県の意識として、その辺りを「地元」として捉える場合は、「小野町とその周辺」と「田村市」と考えて頂きたい。それで、私の方からは、何故、学級数が「2」が駄目なのか、その理由を聞きたい。この理由を共有しておかないと、今後、統合する高校が同様の状況になった時に問題になったら困るので、説明して頂きたい。

【中野正人】(県立改革室長)

私の方から、「何故、2学級だと問題なのか」については、2学級の募集定員は1学年80人となり、それに合わせて、教員の数も法律で決まっていることから、学級数が少なくなれば、それに応じて教員の数も少なくなってしまう。そうになると、例えば、普通科の学校の場合、教員数が少なくなれば、選択科目の幅を狭めざるを得ない状態になり、加えて、部活動において、生徒数が少ないと、団体スポーツの部が開設できるかどうか微妙になるとともに、部の顧問として、引率する教員数が減ってくれば、子供達の希望するような部活動の設置が難しくなってしまう。やはり「一定の規模数」として「4~6クラス」としているが、そういった一定の学級規模が無いと、子供達の中で、選択科目とか部活動は、もちろんのこと、自分のテリトリー以外の子供達と切磋琢磨できるような環境あるいは社会性を育

む環境に触れる事が難しくなってしまう。本来、高等学校教育というのは、社会に出る一歩前の段階であるため、そうした社会性を身に付けることを非常に重要視される段階であると捉えれば、教育環境としての高等学校教育においては「4~6 クラス」の規模が必要であると考へ、統合し魅力化を図りながら、学校作りを進めていきたいという思いで、改革案を示させて頂いた。

【二瓶晃一】(小野同窓会副会長)

クラスの割合によって、先生の数が法律で決まっているという事でよろしいか。

【中野正人】(県立改革室長)

その通りである。

【二瓶晃一】(小野同窓会副会長)

部活動については、今後、おそらく「根本的に学校でスポーツをやるのか」といった問題も含めて、様々な検討がなされていくと思う。社会性の問題に関しても、果たして、同学年の枠の中で過ごしていく事で社会性を育めるのかと考えれば、それよりも、地域の中で社会に出て、世代の違う人達と触れ合った方が、もっと社会性が育つのではないかという考へもある。その辺の部分は、必ず、これが答えだというのは、無いような気がする。しかし、法律で学校の先生の数が決まるという事であれば、その枠内の中で、なるべく学級数を減らさないようにしていくべきだと思う。今後の話だが、本当により良い教育というのは何だろうかという事を考えた時、地域にとって、子供達にとって、福島県にとって、そういった物の尺度で、改革を行う事が、教育にとって良いのかというのを、これから、みんなで考へていかなければならない。今回の改革については、一定の基準を提示したので、それを踏まえて、「法律によって学校の先生が少なくなるから、どうするか」「部活動はどうするか」「社会性を育むためにどうするか」といった問題点は、地域性を考へると、これから、どんどん子供の数が減ってくるのだから、別の視点からアプローチして、なおかつ、この地域独自の考へを出していかなければならないので、そういったところを皆さんで、考へていく事ができれば良いと思う。

【村上昭正】(小野町長)

クラスの割合によって、先生の数が決まっているという事だが、岩手県を例に取れば、「1 学年 20 名でも認める」という地域の学校がある。だとすれば、高校全体で生徒数が 60 名くらいになるわけだが、これは法律違反にならないのか。それと、部活動についてだが、中学校までは義務教育なので、ある程度、地域の学校に行かなければならない。それで、高校も、小野高校は、昔は野球が盛んだったが、今は、チームも組めないような状況で大変なのだが、その学校を選択するのは子供達である。野球部がこのような状況になっても、入部する子供は居るのである。学校側は、子供達がそれぞれの部活動に入部する事を理解しているので、部活動を問題にあげるのは、ちょっと違うような気がする。それと、小規模校についてだが、「1 学年 20 人」を認めている地域は、20 人を割ってしまえば、学校の存続が不可能になってしまうので、人数を確保するため努力していると思う。それで、今後、将来的に、少子化がこのまま進行してくれば、結局、都市部の学校だけが選択肢に残ってしまうようになるのではないかと懸念している。そうなれば、小野町から郡山市まで通学すると

なれば、電車を利用して1時間30分くらいは掛かる。それを往復するわけだから、時間の無駄になってしまう。いろいろな意味で、先程も申し上げたが、事前に、町と県側が協議していたならば、「どのくらい町側が負担すれば成り立っていくのか」といった話も出来たのではないかという気がしている。確かに、県立高校ですから、我々に権限は無く、様々な協議をしようとしても、どこかで制限が設けられて、「小野高校と町が連携協議をしましょう」となっても、どこかに「影」があって、これ以上できなくなって、現在に至っている。「少子化は、致し方無い」という事は、誰もが認めるところであるが、何らかの手立てがあったのではなかったかと思う。

【中野正人】（県立改革室長）

岩手県の「1学年20人」という話は、確認が取れていないので、何とも言えないが、福島県の場合、例えば「1学年1学級」を本校化した、つまり「1学年40人学級」の学校において、実際に募集しても募集人数（40人）に至らない現実がある。そのような状況下で、今後、生徒数が20人を下回るような事になるなら、学校存続について検討させてもらうとして「前期計画」において「1学年1学級」とした学校が6校あるが、1学年に複数学級ある学校においても、「1学級20名までは大丈夫です」とはしていない状態であり、「1学年1学級」とした例外的な措置という形で説明させてもらっているところである。

【村上勝徳】（地元有識者）

令和10年度の高等学校の配置で、県中地区は「キャリア指導推進校」ということで、「田村4、船引・小野統合校4」となっているが、立地的に田村地区全体を見たら、不公平に感じる。三春を残すのであれば、東部の小野を残した方が良いのではないかと思う。

【中野正人】（県立改革室長）

統合の組合せについては、様々な検討をしてきた。お話にあった内容も検討の中では、検証しながら、議論を進めてきた。その中で、小野高校・船引高校両校については、小野高校には「文理」というような形で進学に向けた系列を持っており、船引高校も進学に力を入れている。また「ビジネス」という部分でも、共通する所があるなど、学びの部分での共通点が多いこともあり、この2校の組み合わせを決断したもの。

【村上勝徳】（地元有識者）

統合の決断に至った事は分かったが、船引高校を残すというのは、どういう意味合いなのか。

【中野正人】（県立改革室長）

船引高校の校舎を利用するという点については、広く子供達が通える箇所に統合校を置くべきであろうという観点から、船引高校を利用することとしたものである。

【村上昭正】（小野町長）

福島県内を広い視点で見た時、田村エリアに3つの高校があるというのは、県内でも稀な気がする。石川郡は、私立の学法石川があるが、県立高校は1校しかない。そういったバランスを考えると、田村市という大きな枠の中に残すというのは、ある程度やればできるかと

思うが、バランスを考慮してもらえれば良かったのではないかと考えている。それ以上に、私が思っているのは、小規模校をコミュニティ・スクールとして残して欲しかった。鈴木教育長には「1 クラス 40 人くらいの学校を町と連携させてもらえるなら、一生懸命頑張って、日本一の高校にします。」と話をしてきた。それだけ、町にとっても、地域にとっても、高校という存在は大きな意味を持つものだと、私は考えている。先程、県側が説明した、少子化の内容、改革の内容については、十分理解できるが、我々の考えも、十分理解して頂きたいと思う。

【梅原和也】（小野高校 PTA 会長）

私の子供は、3 人共小野高校である。上の 2 人は卒業し、末っ子は今、在学中。家の立地から見れば、進路先として、田村高校、船引高校という選択肢もあったが、みんな小野高校に行った。何故、みんな小野高校に行ったか、私はわからないが、子供達の中では、小野高校に魅力というものがあって、その魅力に惹かれて、入学し、勉強し、卒業して社会に旅立っているのだと思う。私自身は、船引に住んでおり、職場は三春で、出身校は小野高校である。住民から見れば、小野高校は、平田とか川内などからも通学していると認識されているわけだが、もし、小野高校が無くなると、通学する学校が遠くなってしまい問題が発生してしまう。逆に、田村高校が合併という話になれば、三春地区は、交通の便が良いので、東西南北どの方向でも通学が可能であるという話があった。それで、実際に統合の話が上がった時「どの学校が統合するのか」と、会社の仲間などと話をしていたのだが、「小野と船引」が統合となった事で、残念な思いをした。小野高校には農業系の科があるわけだが、船引高校と統合した場合、どのような扱いになるのか。船引高校は、グラウンドが広く、運動部の活動が盛んだが、統合した場合、農業系の学習はどうなるのか伺いたい。

【中野正人】（県立改革室長）

統合校における、学びの在り方については、これから両校の先生方と具体的に検討を進めていく事になっている。今現在、小野高校の総合学科では、産業技術という農業に関連する系列がある。統合校も総合学科を立ち上げる際に、「農業の系列を設けていくのか、それとも、また違ったような系列の設け方を進めていくのか。」この件についてまだ白紙の状態だが、今後、両校の先生方と、より具体的な検討に入った際、考えていく。

【有賀仁一】（小野町教育委員会教育長）

今年の 3 月、小野中学校を卒業した生徒が 85 名だった。それに対して、昨年度、1 年間、小野町で生まれた子供は 35 名だった。本当に、少子化は今後、加速度的に進んでいく事が想像できる。2 年前、小野町は、5 校の小学校を統合して、小野小学校 1 校にしている。本当に子供が少なくなっていく中で、この地域をどうやって維持していくのか。それで、只今、後期計画の説明を伺い、その中で、県教委として学校教育審議会を経て、こういった取り組みをしているのは、当然の事だと思し、当たり前だと思う。それを踏まえて、4 つの基本方針を示した中で、4 番目に「過疎・中山間地域の学習機会の確保と教育環境の向上」というのがあった。これを見た時、今後、後期計画が完了する頃には、すぐに、次の統合の話が出てくるのではないかと感じるのである。そういった時に、県全体の高校教育のバランスを考えた時に、「本当に船引が良いのか。やはり、小野の方が良いのではないか。」と思うところがある。

【菅野崇】(県立高校改革監)

本日は、こちらから持参した資料を用いて説明し、その後は、皆様からの御意見を伺う形で進めてきたが、御意見の中にあつたように、やはり、少子化あるいは社会環境の変化が、急速に進んでいる状況を捉えると、県教育委員会としては、令和 8 年 4 月、船引高校と小野高校の統合を行う事によって、この地域や、田村郡、県内全域の教育環境を今後の子供達の為に整えていくためには、どうあれば良いのかという事を起点にして考え、改革計画を示させて頂いたところである。先程から、効率化を進める事で「人が減ったから学校も減らす」というのは、「地方創生」に逆行しているのではないかという御意見を頂いた。あるいは、地域と学校の運営との関わり合いを、しっかり作っていく事によって、この地域における教育の確保が、しっかりできるのではないかという御提案も頂戴した。また、一番意見として多いのが、今回、県教育委員会が示した「後期改革計画」の進め方に、町長からは「大きな疑問がある」との御指摘を受け、この他に皆様から、「もう少し意見を聞きながら、進められないものなのか」といった御指摘も頂いた。こういった点については、我々も、皆様からの御意見を頂きながら考えていきたいと考える。それで当初から「地域の方が理解していない。それならば、地域住民に対する説明会が必要だ。」という御指摘について、町長は「説明会は行うべきである」と、お考えか。

【村上昭正】(小野町長)

我々が地域に対して、「こういう形で説明会がありました」と伝えるよりは、やはり、県の方から「こういった考えで、統合をします」といった提示を、是非、町民の皆さんにしてもらいたいと思う。よろしくお願ひしたい。

【大沼博文】(県教育長)

今日は、様々な御意見を頂き、感謝申し上げます。複数の方から、「後期実施計画発表前に、地元への説明や協議があつて然るべきであつた」という御意見を頂いた。この御意見は、真摯に受け止めさせて頂く。町長から、御依頼の件については、地域の皆さんに、今回の統合の方向性、内容について、しっかりと御理解を頂く事が大事であると考え、引き続き、丁寧に説明をしていくためにも、住民向けの説明会について、町と協議させて頂き対応してまいる考えであるので、よろしくお願ひしたい。

【菅野崇】(県立高校改革監)

本日、頂いた意見につきましては、我々の方で整理して、次回の懇談会で、皆様にお話できるようにしてまいりたい。

(5) 閉会